

花一会図書館便り

10・11月号 花一会図書館 作成/令和7年11月17日発行

【TEL&FAX】

0136-57-6085



花一会 HP



Facebook



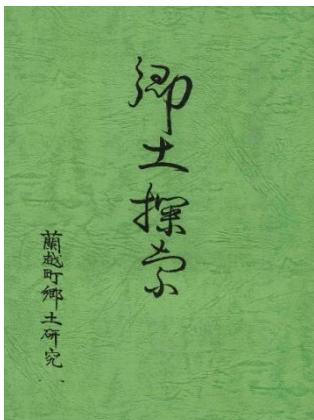
Instagram



X (旧 Twitter)

第20回

「郷土探索への道 歴史検索・探索編⑤」



冊子『郷土探索』は、「蘭越町の文化財、記念物その他郷土研究に必要な調査研究と資料の収集をなしその歴史の探求をすることを目的とする。」として昭和48年に設立された「蘭越町郷土研究会」が会員の調査や研究の成果をまとめて発表したもので、貴重な郷土資料になっています。

昭和51年に第1号が発行され、以来平成23年まで全28冊が35年間に渡って刊行されました。

この『郷土探索』、全号を花一会図書館で閲覧できます（一部貸出
しも可）。

また、郷土探索の電子データは、北海道立図書館北方資料デジタルライブラリー内の蘭越町花一会図書館サイトで公開しています。インターネットが利用できるスマホやご自宅のパソコンで見ることができます。プリントアウトすることもできます。蘭越町で唯一かもしれない郷土研究資料です。是非、町の忘れ去られようとしている史実や知られざる口伝に触れてみてください。



このQRコードを読み取ると『郷土探索』の
電子データをご覧いただけます。

『郷土探索 追録 第一號』 目次（抜粋）

蘭越の米づくりは港から。
市街地を焼き尽くした蘭越大火。

「昆布」地名の謎、
開拓民の保存食「コーレン」

自作スキーで冬を楽しむ蘭越小学校スキー部。

『郷土探索 第二十六号（追録第二号）』 目次（抜粋）

- 吹雪の日も馬ソリの定期便（その六十八）
- 住民の意見でうまれた八月成人式（その七十五）
- 農閑期の楽しみ ばん馬競争（その一〇八）
- 小京都めざした町名の街づくり（その一一七）
- 山村広場にもあつた温泉旅館（その一二六）
- 金鉱の代わりに発見された薬師温泉（その一二七）
- 渡し舟と、こぶ爺さん（その一三一）

裏面には記事の一
部を掲載！



戦後の町民に夢をあたえた三劇場

テレビに押されて消えた銀幕



蘭越劇場（昭和39年）

昔の町民の娯楽は、春の運動会、夏は盆踊り、秋はお祭り、冬は正月のカルタ取りなどごくわずかなものしかなく、地域の住民はそれらの行事を心待ちにしていた。戦後、テレビが普及するまでの町民の一番の娯楽は、何といっても映画を見ることがあった。町内で最も早く開業したのは『蘭越座』（昭和三年室野弥市氏創業、昭和三十五年『蘭越劇場』に改名、三一五席）で、現在の消防庁舎の場所に建てられていた。

昭和十七年には、『目名栄楽館』（四〇〇席、武田幸之助氏経営）、昭和二十一年には『昆布座』（四〇〇席、高橋義雄氏経営）がオープンしている。戦後は、封切上映も度々行われ、三つの劇場はいつも満員の状態であった。

また、流行歌手や舞踊、浪曲などの舞台公演も行われて、札樽方面まで出かけなくても生の芝居を町内で楽しむことができた。この他、町内の金融機関や新聞店、各学校が主催する映画会も町民の楽しみのひとつであった。

しかし、昭和三十年代後半になってテレビが一般家庭に普及するにしたがつて観客が減少し、『目名栄楽館』と『昆布座』が昭和三十九年、『蘭越劇場』は昭和四十五年にそれぞれ営業を中止した。

向きを変えた？ チセのニワトリ（その二）

地形・植生の変化が原因か

チセヌプリのニワトリの残雪は、『右向きか、左向きか』についてに、最近小さな論争が巻き起こっている。

毎年、五月中旬から六月初旬にかけて、蘭越のシンボル、チセヌプリの中央にくつきりと浮かび上がるニワトリの残雪は、農業のまち蘭越に春耕の時期が来たことを教えてくれるとして、古くから町民に親しまれてきた。

古者の多くは、ニワトリは雷電側を向いていて、トサカ（頭）としつぽの部分が大きい年は雄鳥で、その年は雪が多かったので豊作、逆に、トサカとしつぽが小さい雌鳥の年は不作になると話しており、一般的には、左向きが正しいようである。

しかし、ここ数年、ニワトリは右向きだと思っていたという人も多く、その多くは、古者の話を知らない比較的若い世代のようと思われる。右向き説が増えたのは、どうやらチセヌプリの地形や植生の変化によって、残雪の形が微妙に変わってきたことが原因らしい。



H元年5月撮影の残雪と左向きの模式図



H14年5月撮影の残雪と右向きの模式図

また、ここ数年、左向きと見た場合の、首のくびれも不明瞭になつて残雪の形は一定ではないが、特に、今年の残雪は、右向きと見た場合の頭の部分が、見事な鳥の形に見えている。

また、ここ数年、左向きと見た場合の、首のくびれも不明瞭になつており、この形が定着していくと『右向き』が一般化していく事も考えられ、来年以降の現れ方に注目していきたい。